日刊 動労千葉

80.7.19

No.486

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一－八（動力車会館）
（鉄電）二二五八～九・（公衆）〇四三(22)七二〇七

三里塚・ジェット闘争貫徹！「国鉄35万人体制」粉砕！

土屋一味の自称「本部派佐倉支部」は存在しえない

ペテン的『業務再開』路線に対しわき上る怒りの声！

「本部」反動分子・嶋田、土屋らの「再建支部→地本」デッチ上げ策動は、動労千葉の総決起によってことごとく粉砕され、ついに彼らは、苦しまぎれに「業務再開」なるペテン路線に逃げ込もうとしている。土屋のいう自称「本部派支部」による「業務再開」は全く何の権能もなければ正当性もないことは、もはや明らかである。規約・規則を全く無視し、こそこそと「業務再開－本部派支部」をデッチ上げ、労働者を売り渡そうとしているのが、他ならぬ土屋ら反動裏切り分子なのだ。

組合員を引き廻し、サギにかける「業務再開－本部派支部」！

「業務再開－本部派支部」なるペテン的組織デッチ上げは、執行部と称される役員ですら全く知らないというおそまつさでも明らかであるが、決定的に重要なことは、現・堀口新執行部が選出された昨年十一月十六日の佐倉支部定期大会は、今回、土屋らが「業務再開→本部派支部の支部長」として名前をあげている山下（前支部長）その人が召集し、運営し、決定した大会であったという厳然たる事実である。つまり、正規の手続きをへて選出されたのが現佐倉支部の堀口執行部であり、この定期大会をもって、新旧執行部が交代したのである。従って、土屋一味がいう「業務再開－本部派執行部」の継承性・正当性は、全くないのである。

自称「本部派支部」なるものは、一体全体、どのような規約のもとに、いつ、どこの機関で、役員を選出したというのか。唯一規約・規則にもとづいて出来ることは『本部』がまず再登録を実施し、その上にたって結成準備委員会を発足させ、結成大会を開催することだけである。佐倉においてそんなことは、一切なかったのである。

彼らがどういいのがれようとも、役員（「本部」派）すら知らない、組合員にとっては、寝耳に水のこのデッチ上げ「組織」は、ユウレイ組織以外のなにものでもなく、まさに、良心的佐倉支部組合員の引きまわしに他ならない。

形で、機関区労働者を当局に売り渡すことを平気で行う組合＝「本部」。こうした「本部」の方針で動力車職場の労働条件が、維持・向上できるというのだろうか。

土屋一味はまさに、このような動労「本部」反動分子と結託して私利私欲のためにのみ動労千葉に対する組織破壊策動を行なっているのである。

五五・一〇「ダイ改」＝三十五万人体制の狙いと本質を正しく見抜き、全国の労働者とりわけ、国鉄労働者に警鐘乱打し闘い抜いている動労千葉の路線と旗のもとに、佐倉支部が一丸となって闘い抜く体制を早急に確立しなければならない。

55・10「ダイ改」を動労千葉の旗のもとで闘い抜こう！

いま、五五・一〇合理化、三十五万人体制攻撃は現実のものとして目前に迫っている。五五・一〇合理化－三十五万人体制の布石ともいえる、武蔵野操車場の開業を許し、貨物安定宣言＝タコ壺路線に埋没し、いままた、合理化卒先協力という

七月十六日、千葉朝鮮信用組合本店五階ホールに県労連傘下各労組、社会党、在日朝鮮総連、民主団体の二百五十名が結集し開催されました。

集会は、光州をはじめとする韓国全土にわたる人民の英雄的決起に深い共感と支持を確認すると共に、全斗煥ファシスト体制による南朝鮮人民への弾圧、とりわけ光州市民・学生・知識人への虐殺行為を弾劾し、日朝人民の連帯闘争をさらに強化することを確認しました。

集会参加者は、金大中氏の「政府転覆」容疑での軍法会議への送致＝死刑策動に怒りをこめて抗議し、金大中氏や崔哲教氏をはじめ、死刑を含む過酷な弾圧に抗し、獄中で不屈に闘う人々への連帯闘争と救援活動の強化を確認しました。

全斗煥ファシスト体制を背後から支えているのが、日本支配者階級である以上、われわれは、日朝人民の連帯にかけて、軍事大国化阻止、朝鮮侵略反対の闘いを、日本でまき起していこうではありませんか。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！